

ISHIN

医心

隔月刊
無料配布

2026.5

No. 111

シリーズ 第2回 地域医療の変革者たち

白山石川医療企業団副企業長
兼 公立松任石川中央病院
放射線総合診療センター長

横山 邦彦

ALS の治療をさらに前へ!

若き研究心を刺激せよ

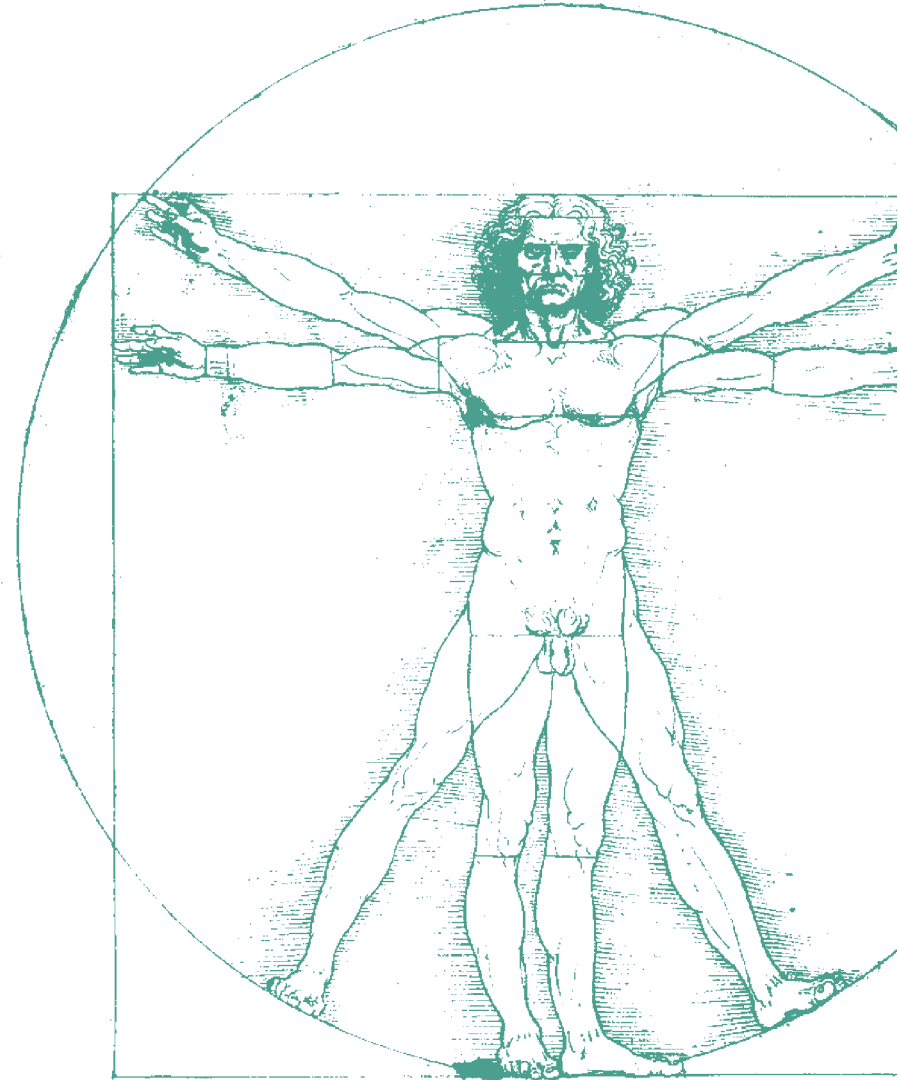
富山大学附属病院脳神経内科 教授

山下 徹

美しさが、日常を高める。

三谷産業コンストラクションズ株式会社
代表取締役社長

土田 和宏



CONTENTS



04 シリーズ 第2回 地域医療の変革者たち

白山石川医療企業団副企業長
兼 公立松任石川中央病院 放射線総合診療センター長
横山 邦彦



18 ALS の治療をさらに前へ！ 若き研究心を刺激せよ

富山大学附属病院脳神経内科
教授
山下 徹

11 ISHIN column vol.5 奇跡的に生まれ変わった野村病院

医療法人社団尽誠会 理事長
野村病院グループ CEO
野村 祐介

27 ISHIN column vol.2 医療はなぜ忙しくなり続けるのか

日本医師事務作業補助者協会
理事長
矢口 智子

12 美しさが、日常を高める

三谷産業コンストラクションズ株式会社
代表取締役社長
土田 和宏

29 ファイネスのお聞かせください、ドクター！ DOCTOR'S VOICE

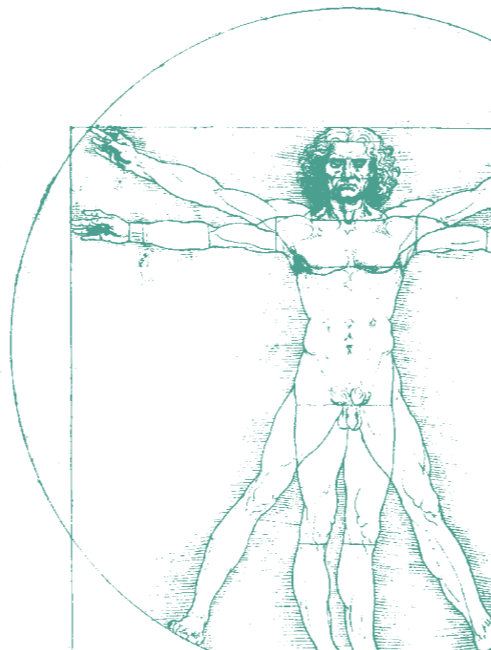
もりおか眼科 院長
盛岡 正和

16 ISHIN column vol.1 病院のイメージを一新、ひかりプロジェクトの誕生へ

医療法人社団 紫蘭会 光ヶ丘病院 副院長
リハビリテーション科専門医
新藤 恵一郎

医療法人社団 紫蘭会 光ヶ丘病院 理事長補佐
リハビリテーション科専門医
一般社団法人ヒカリプロジェクト代表理事
新藤 悠子

31 医心ニュース ファイネスALL in for メディカルフェアが開催



STAFF

Publisher 羽田和政
Editor 坂口俊克
Writer 上乗繁能/大廣 涼
Photographer 藤森祐治
Designer 吉田真人/西村恭子
Advisor 後山潤一/田中尚人

発行/NPO法人 学産プロジェクト
〒920-0213
石川県金沢市大河端町東55番3号
TEL 076-203-6613
e-mail:info@project-ishin.net

「建物の主治医としての自覚」 —これが、みづほのこだわりです。

きたがわUIクリニック 様



外観



受付・待合室



内診室

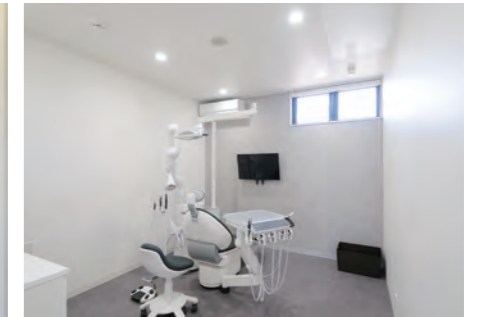
はじめ歯科クリニック 様



外観



待合室



特診室

独立の夢、応援します。

培ってきた豊富な経験とノウハウを基に 医業経営コンサルタントによる開業支援

私たちみづほ工業は、医療建築分野での
提案営業スタイルを確立し、
病医院や福祉施設の開業を支援しています。
これまで培った豊富なノウハウを基に診療圏調査、
土地探し、施設提案、事業運営までを
専門スタッフが丁寧にサポート（無償）いたします。
多くのドクターが抱かれている開業についての
不安や不明な点を和らげ自信を持って開業へと
進んでいただけるお手伝いができればと考えております。

医院・歯科医院開業個別相談会

日時 ● 令和8年6月27日(土)・28日(日)
10:00~17:00

会場 ● みづほ工業(株)本社(八日市)

詳しくはHPをご覧ください。

<https://www.mizuho-co.com/medical/>

申込QRコード



木造の新しい選択肢。

店舗・事務所・倉庫・医療福祉施設・保育園・アパートなど鉄骨造が一般的だった大規模建築を木造で。

木造建築の新しい選択肢「テクノストラクチャー」。木造でありながら柱の少ない開放的な大空間を、「木」と「鉄」のハイブリッド複合架「テクノビーム」で3階建、延床面積3,000㎡まで対応可能です。みづほ工業は建築物の木造化を推進し、地球温暖化の防止や循環型社会の形成、そしてカーボンニュートラルの実現に貢献していきます。

新しい建設サービスの展開
MIZUHO みづほ工業株式会社

- 建築コストの削減
- 建築工期の短縮
- 高い耐震性と耐久性
- 建物の軽量化
- 設計自由度の高さ
- 大空間の木造建築



パナソニック耐震工法 テクノストラクチャー



● 医療施設

● クリニック

● ドクター

● 薬剤師

● 看護師

地域包括ケアシステムをサポート

ICCの情報技術「患者情報共有ネットワーク」は
地域包括ケアシステムに関わるすべての方のニーズに応える
ソリューションとして、さまざまな医療の現場で生かされています。
私たちはITで万全のネットワークを築いていきます。

● 栄養士

● 介護士

● ソーシャルワーカー

● ケアマネジャー

● 民生委員

● 地域の方々

● 在宅高齢者施設

● 民間支援相談室



Link The Medical Information

ITによる医療情報ネットワーク

icc 株式会社
石川コンピュータセンター

医療システム本部 / 〒924-0833 石川県白山市向島町1100番地
TEL (076) 268-8315 (代) FAX (076) 268-7145
医療向けソリューション <https://www.icc.co.jp/medical/>

■ 本社 / 〒920-0398 金沢市無量寺町八6番地1
TEL (076) 268-8311 (大代表)
<https://www.icc.co.jp/>

■ 支社 / 東京・名古屋
■ 支店 / 大阪
■ 営業所 / 富山・福井



白山石川医療企業団副企業長
兼 公立松任石川中央病院
放射線総合診療センター長

横山 邦彦

危機感が生んだ変革の気風が 医療の質と価値を高めている

シリーズ 第2回 地域医療の変革者たち

公立松任石川中央病院

「地域医療の変革者たち」2回目は、前号で紹介した石川県白山市の白山石川医療企業団が運営する公立松任石川中央病院だ。医療圏人口約20万人を抱える急性期病院は、PETセンターの完成などを機に大きく変わり始める。変革をもたらしたのは何か？
躍進のきっかけをつくったキーマンの一人、横山邦彦副企業長・センター長の取材から要因を探った。

— 患者の相談依頼に衝撃 —

「赴任した当時、世間の知名度は低いし、ブランド力もない。圧倒的に存在感が薄い病院だったと思います」

インタビュ어의のっけから、横山邦彦副企業長・センター長はそう呟いた。今から20年前の2006年4月、腫瘍核医学や甲状腺疾患を専門とする横山医師は、公立松任石川中央病院（以下、松任中央病院）が、自前の施設として建設したPETセンターのセンター長に迎えられた。前任地（金沢大学附属病院）の上司や仲間から「がんばって日本のPETセンターにしてほしい」と送り出され、大きな期待と夢を背負っての着任だった。

ところが、しばらくすると患者や家族からこんな相談をもちかけられる。
「もし甲状腺癌の手術になったら、いい先生を紹介していただけませんか？」

「〇〇病院で甲状腺の治療をしたいので、紹介状を書いていただけませんか？」

横山医師は、言葉に詰まった。院内にれっきとした専門医がいるのに、なぜ他所の病院や医師を紹介しないといけないのだろう。率直にそう感じたのだ。

「患者さんからの要望なので断るわけもなく、紹介はした」ものの、複雑な思いは消えなかった。大学では言われたことがない言葉であった。

そのころの松任中央病院は、地方の公立病院では全国でも極めて珍しい自前のサイクロトロンとPET

Tセンターをもち、総合健診センター、いわゆる人間ドックの完成で、がん検診や予防医療に力を入れている。がん検診にとどまらず、救急医療や循環器のカテーテル治療でも高い実績を上げ、先進的な医療にも積極的だった。にもかかわらず、何度か通院する患者からためらいもなくそんな依頼や相談が舞い込んだ。

「患者さんは病理検査結果や診断がつき、たとえば手術をすすめられたときの気持ちはといえば、有名であるとか漠然とした病院の評判にすがりたくなるものです。結局は、ブランドです。患者さんの不安な気持ちを思えば、痛いほど理解できます。ただ私が何より衝撃を受けたのは、当院が地域で頼れる存在になりきれしていない現実でした。急性期病院として優れた医師や設備や先進的な治療を受けられる環境があるのに、患者さんの側に認識されていない。これは問題だと思っただけです。できることは何でもして、地域のいのちと健康を支える存在をもっとアピールしないといけない。そうしないとますます忘れられてしまう。そんな危機感で当時はいっぱいでした」

— PET検査用のFDGを自前生産 —

松任中央病院を運営する白山石川医療企業団は、2008年4月に地方公営企業法を全部適用して以来、現在まで安定した経営を続けている。これはコ

技師や多職種のスタッフにも、論文や学会発表など学術的な活動を積極的に呼びかけました。活動を多くの人に伝えることで思考がまとまり、自信にもつながります。企業という研究開発と同じで、全国区で名のある病院は必ず、研究や学術的な活動をしています」

— ID-Linkが被災者を救う —

変革への積極姿勢は、病院の電子化やDX化でも発揮されてきた。「電子連携は専門ではないですが、外部のシステム会社と連携し、システムの設計、変更から実際の運用にいたるまで深くかかわってきました」と、横山副企業長は振り返る。

先駆けが、PET検査に特化した電子連携システムである「ねっとPET」だ。松任中央病院に着任前、横山医師はこのシステムを外部の会社と共同開発した。

「PETは当時まだ珍しい検査で大学にもありませんでしたから、病院外の先生方にも使ってもらえるような新たな仕組みを加えたのです。簡単に言うと、ねっとPETのシステムを使っていつでも病院外の先生方が、PETの検査予約を入れたり、PET画像や診断レポートを見られるようにしたわけです。当時はFAXで予約して検査後に診断レポートと画像DVDをPETセンターの職員が紹介元へ届けていましたから、スピード感は全然違いました」

院外にながら、院内の医師と同じように予約



コロナ禍の影響や、昨今の物価高騰などで全国の病院の多くが赤字経営を余儀なくされる中、驚異的ともいえる。

その成長を支える一番の要因が、急性期を担う松任中央病院の存在だ。その躍進ぶりは、企業団が一丸となって進めてきたさまざまな改革と重なる。

横山副企業長の専門分野でいえば、PETセンターの規模と機能の拡充がある。現在、松任中央病院のPETセンターは、PET/CT3台とサイクロトロンの設備を保有する。特筆すべきは、サイクロトロンの設備があることで、主にがんの診断のための検査で使用する放射性薬剤FDGや認知症診断に欠かせないアミロイドPET製剤も自前生産できることだ。これにより1日20件以上の検査が可能になっている。サイクロトロンの施設で十分な量のFDGを自力生産できる地方の病院は、全国でも稀だ。LINACや手術支援ロボット・ダヴィンチといった最新鋭の医療機器も備え、病院全体で先進的な医療が行える。その中心的な役割を果たしているのが、PETセンターといえよう。

「PET検査はもちろん、甲状腺疾患の治療においても、2010年以降他所に負けないだけの実績をあげてきています。私のメインはPETセンターですが、病院全体で診療レベルを上げ、患者さんへのサービスを含めて、地域を巻き込んだ医療や介護のさまざまな仕掛けを促してきました。テレビや新聞、公開講座などを通じて情報発信し、診療放射線

ができて、検査結果を確認できる。このねっとPETを一步進めて、CTやMR検査、さらに松任中央病院のカルテまで参照できる機能に拡張した。それもあって、電子化は一気に進んだ。これをもとに2013年には、患者の診療情報を、患者の同意があれば医師同士が双方向で閲覧できる「いしかわ診療情報共有ネットワーク」(ID-Link・通称いしかわネット)の運用が県内のトップを切って開始された。いしかわネットは、大学病院や県立中央病院などの基幹病院と、地域の病院やクリニックをネットワークでつないだ電子的医療連携システムで、最大の特徴は、患者の同意があれば、患者の診療情報を、紹介先の病院またはクリニックの医師が閲覧できることにある。

横山副企業長は、そのいしかわネットの先駆けとなる仕組みを考案したわけだ。前提となったのは、地域の医療機関や先生方との医療連携だった。

「最初は、当院単独で地域の先生方が、患者さんの同意を得て当院のPETやCTの情報、カルテなどの診療情報を見にくる形式でした。ところがそれだけだと、患者さんを紹介した地域のクリニックの先生方は、当院の診療情報を見ることができても、その患者さんが大学病院に行ってしまうと、先生方からはその情報を見られなくなります。そこで、大学病院や県庁、県医師会にも連携、協力をいただいで、ネットワークの対象が県内全域に広がって、運用できるようになりました」

それから13年余り、いまやいしかわネットは大学

病院や公立病院、公的病院など31の基幹病院とクリニック、薬局、訪問看護、ステーションなど約730の医療機関や関連施設にまで広がっている。これだけの登録数をもつ診療情報共有ネットワークは全国でも例がなく、「登録数は日本最大規模」（横山副企業長）で石川県民の宝ものだという。

閲覧できる診療情報も、PETやCTの画像、服薬状況、血液検査の結果まで読み取れるようになっていた。過去の病歴や複数の医療機関にかかっている状況も把握できることから、仮に患者が別の土地で病院にかかっても、余分な検査を省いたり、薬を処方する際にも役立つ。

「能登半島地震で被災した患者さんが、当院など移住先近くの病院にかかったときいしかわネットにつながっていたことから、患者さんの同意を得て、迅速な投薬や診療の継続が実現できました」

— 震災で注目された電子化 —

震災対応といえば、もうひとつ重要な事例がある。松任中央病院では、PETやCTなど全診療科の全画像データをクラウド上に保管している。クラウドPACS（ピクチャー・アーカイブ・コミュニケーション・システム）と呼ばれる電子保管庫だ。2010年に当時の総務省の補助金をもとに、横山副企業長が中心となって構築した。

クラウド化を進めた背景には、データ量が日々膨らむ。薬の用法の説明や副作用の注意にとどまらず、当院の連携薬局では、患者さんの同意を得たうえで薬剤師さんがいしかわネットで当院の情報をもちに、服薬指導を行うため質が非常に高い。たとえば、糖尿病の治療薬が増量になった患者さんに、血液検査のHbA1c（ヘモグロビンA1c）の数値が悪化した情報があると、『糖質の多い食事はもつと控えた方がいい』など踏み込んだアドバイスができます。その情報は必ず医師に報告され、医師は診療に活かせるわけです」

「この調剤薬局との電子連携を2015年から続けてきたことが、電子処方箋の迅速な地区導入に大いに貢献しました。当地区の薬局の電子処方箋の普及率は100%で、2024年以降全国1位をずっとキープしています。電子処方箋によって医師と現場の薬剤師が、双方向でやり取りできるようになったことで、患者さんの安全性と医療の質が担保される。この電子処方箋の最大のメリットが当地区では実効性を持っています」

一方、院内のDX化の一環として、横山副企業長が「患者さんが使うと便利な機能を実装できないか」とシステム会社と2019年に共同で開発したスマートフォンアプリが、PHR（Personal Health Record）アプリのNOBORI（ノボリ、PSP社、東京）である。患者はスマホを使って次の診察の予約確認ができ、受診を知らせるメールが届くのを忘れることがない。当日は自宅にいながら受診手続をして、待ち順番を確認してから来院すれば、院内で



大になっていくこと、災害などで病院が被災した場合の個人情報や診療情報の流失を防ぐBCPの狙いがある。たまたまその翌年の2011年3月11日に東日本大震災が起こった。震災に先駆けて、クラウド化を進めていた横山副企業長は「まさか大震災が起きるとは予想もできなかったが、結果的に当院のPACSが重要な災害対策になるとして、世の中から注目されるきっかけになった」と振り返る。

— 行政と認知症予防にも取り組む —

電子化やネットワークの構築は、もともと地域の医療機関、クリニック、薬局、介護施設などとの連携を深め、地域における急性期病院としての存在を高めるのが狙いだった。しかし実際にシステムが稼働していくと、院内のDX化とも連動して次々と応用が広がり、新たな機能拡大へと結びついた。いしかわネットを用いた地域での薬剤情報の電子共有もその一つだ。当初、周辺の調剤薬局に限ったの実証事業で進められたが、良い事例が数多くあがってきたことで対象を広げつつある。

「調剤薬局は医師の処方箋に基づいてお薬を調剤します。その際、服薬指導を行います。ほとんど待ち時間を減らすことが可能だ。さらに、処方箋の薬局への送信やクレジットカード払いにも対応している。NOBORIを使って、患者自身の健康データを自ら管理するこのアプリは、マイナポータルとも連携している。

2022年度からは、同じく横山副企業長がプロジェクトリーダーとなり、白山市と「MCI（軽度認知障害）」の健診と認知症予防の健康事業にも取り組んでいる。65歳以上が対象で、認知機能チェックと、運動や栄養のプログラムを受けた人の年間医療費と介護費用の合計が、受けない人と比べて「年間26万円」低く抑えられると評判を呼んでいる。

地域内どこでも同質の薬物療法を可能とする処方薬の推奨リストをつくる「地域フォーミュラ」も自治体と進めている。現在、白山石川医療企業団を中心に県内では最初に白山市、野々市市、川北町の地域フォーミュラ（愛称：しらやまフォーミュラ）の作成にあたっている。

「リストは有効性と安全性に基づきジェネリック医薬品（後発薬）から選ぶので、医師は自分の専門外の症状であっても推奨リストに基づいて円滑に処方できて、患者さんの費用負担が減るメリットもある」先駆的な取り組みに挑戦することで、地域における存在感をますます強めつつある。危機意識から生まれた変革の気風は、いまや松任中央病院にしっかりと根付いている。

（次回へ続く）

奇跡的に生まれ変わった野村病院

～危機から脱却し慢性期医療の新たなモデルを築く軌跡～

地域と医療従事者に選ばれる挑戦

全国の病院が経営に苦しむ中、かつては野村病院も極めて厳しい状況にあったのは間違いない。しかし、3つのステップからなる改革を進めた結果、病院は奇跡的とも言える再生を遂げた。現在では「地域から、そして医療従事者に選ばれる病院」として、専門誌などから注目されるようになったのだ。

本連載は当院が危機から脱却し、選ばれる病院へと生まれ変わるまでの軌跡を振り返るものである。医療現場と経営の両面から見た「選ばれる病院」の条件と、今後の医療経営への示唆について考察する。



医療法人社団尽誠会 理事長
野村病院グループ CEO

野村 祐介

第5回…地域と医療従事者から選ばれる病院への進化(後編)

「働きやすい病院づくり」 — デジタル化とESGで

ステップ3(2021年)では、「地域と医療従事者から選ばれる病院」への進化を目指した。

「働きやすい病院づくり」を実現するため、当院ではデジタル化による業務改善とESG経営の推進に取り組むこととし、業務改善の一環として、タブレット端末で操作可能なCTを導入した。操作室と検査室の往復を不要とし、感染対策と業務効率化の両立を実現し、特にコロナ禍において有用性が高かった。また、とろみ自動調理サーバーの導入により、とろみ付けの手間を削減し、職員の業務負担軽減につなげ、創出された時間は他業務に充てることが可能となり、働き方改革の一環として効果を示した。

さらに、見守り支援システムを導入、マット下に設置したセンサーにより、患者の起床・臥床、心拍数、呼吸数をリアルタイムで把握できるようになり、事故リスクおよび夜間業務負担の軽減に加え、データを多職種で共有・活用することで職員のスキル向上にも寄与した。

ウェアを導入し、現場の情報共有を円滑に行うことができるようになった。高齢者人口の増加に伴い介護人材不足が深刻化する中、介護現場のデジタル化は職員負担の軽減とサービスの質向上の両立に不可欠である。

さらに、認知症コミュニケーションロボットの活用も開始した。認知症患者への対応に多くの人的リソースを要する状況において、ICTの活用により業務の一部を補完し、看護・介護の質向上につなげている。

次に、ESG経営の観点から、環境(Environment)、社会(Social)、ガバナンス(Governance)の各側面に注力した。

環境(Environment)については、LED照明および高効率空調設備への更新により、明るく快適で省エネルギーな職場環境を整備した。

社会(Social)の取り組みとしては、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン(DE&I)を推進した。女性活躍を重要テーマとし、「とやま女性活躍企業」に認定されたほか、育児・介護と両立可能な環境整備や男性の育児休暇取得も推進している。これらの取り組みにより、D&IAWARD2024においてベストワークプレイス認定された。

また、多様な働き方に対応する柔軟な勤務形態を導入した。子育て世代に

配慮し、病棟看護師は9時始業とし、介護休暇制度も整備している。さらに、健康経営の考え方を取り入れたウェルビーイング経営を推進し、「残業ゼロで働きやすい職場」を掲げて業務効率化と負担軽減を進めている。これらの取り組みは各種メディアでも紹介されている。

ガバナンス(Governance)面では、事業継続計画(BCP)を策定し、災害時においても地域医療への影響を最小限に抑える体制を整備した。また、コンプライアンス違反通報窓口の設置やハラスメント防止の徹底など、透明性と健全性の高い組織運営を実践している。

これらの取り組みにより、慢性期病院の社会的イメージの向上と、多職種連携によるチーム医療の本格的実践が進んだ。さらに、デジタル化とESG経営を通じて働きやすい職場環境を整備し、病院としての持続可能性と価値向上を目指している。

「選ばれる病院」を目指し進化してきたその先に、病院はどのような姿を目指すのか。

その全体像とは何か。

— その答えは、最終回で。

私たちは医療・介護のサポーターとして
全ての人のチカラになりたい。

私たちは誰からも信頼される
グッドカンパニーを目指します。

Amenity
Corporation

— 人に、よりそう。人で、よりそう。 —



株式会社アメニティ

東京都千代田区神田駿河台 2-1-20

03-6427-6780

03-6427-8210



<https://www.amenity-ss.co.jp/>

全国の事業所はHPの『事業所一覧』をご覧ください。





――余白という贅沢――

ショールームへ「SOSŪ」に足を踏み入れた瞬間、住宅設備という言葉が持つ既成概念は静かに塗り替えられていく。柔らかな香りが漂う空間。余白を贅沢に生かしたレイアウト。優しく落とされた照明が、石や金属、水といった素材の質感をゆつくりと浮かび上がらせる。そこに並ぶキッチンやバススタブは、単なる設備機器ではない。空間そのものの空気を変え、暮らしの美意識を優しく呼び覚ます存在として佇んでいる。

展示されているのは工業製品だ。しかし、その存在感はむしろアートピースに近い。

シャープに研ぎ澄まされたライン。素材が生み出す陰影。触れた瞬間に伝わる重みと静けさ。キッチンや浴槽が背景へ退くことはなく、空間の主役として静かに存在感を放っている。その光景は、ギャラリーにも似ているし、ラグジュアリーホテルのラウンジにも通じる。どこか緊張感を漂わせながらも、不思議と心を落ち着かせる空気が流れている。

この「SOSŪ」を展開するのが、三谷コンストラクションズだ。

当社が提案する「プライム住宅設備機器」は、従来の住宅設備とは一線を画す。単に機能性や価格帯を競うのではなく、造形、素材、光、触感、静けさまで含めて、住空間そのものを設計していくという思想が根底にある。

「私たちが届けたいのは、高価格帯の商品そのものではありません」

そう穏やかに語るのは、三谷コンストラクションズの土田和宏社長。

「お客様が思い描く理想の空間に対して、本当に必要な価値をご提案したい。設備単体ではなく、空間全体の心地よさまで含めて考えたいと思っています」

「SOSŪ」という名称は、「素数」に由来する。

1とその数でしか割ることのできない唯一無二の存在でありながら、すべての自然数を構成する根源的な要素でもある。住宅設備もまた、空間を構成する一部でありながら、それ自体が独立した価値を持つ存在である。そんな思想が、この場所には静かに息づいている。

――空間品質の裏側――

三谷コンストラクションズは1996

年、三谷産業の住宅設備部門から独立する形で誕生した。以来、空調設備、住宅設備、設計施工、メンテナンスまでをワンストップで手がけ、長年にわたり地域インフラを支えてきた企業である。

同社の強みは、「販売」だけで終わらないことだ。

メーカーとの強固な信頼関係に加え、施工管理から保守、修理対応までを一貫して担ってきた実績がある。設備を納めるだけではなく、その後の運用やメンテナンスまで含めて空間に寄り添ってきた。その積み重ねが、現在の提案力につながっている。

近年では、ホテルや高級レジデンス、大型マンションに加え、総合病院や医薬品工場など、高度な設備環境が求められる施設も数多く手がけている。温度、湿度、換気、衛生管理。ほんのわずかな誤差も許されない空間を支えてきた経験は、同社の大きな財産だ。

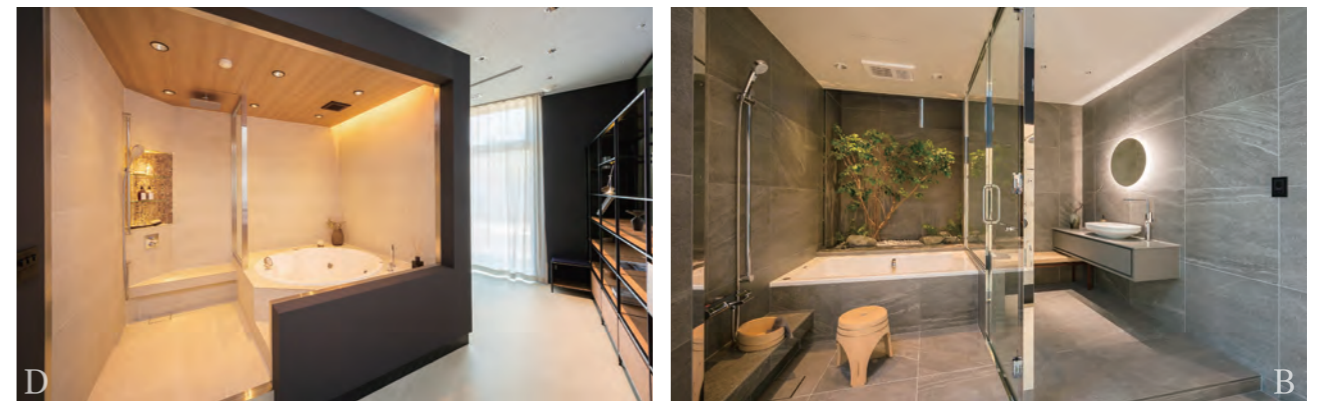
コロナ禍では、空調換気設備を通じて地域医療の現場を支援した。目に見えない空気をどう循環させるか。人が安心して過ごせる環境をどうつくるか。設備会社として積み重ねてきた知識と技術が、社会に求められた時間でもあった。



美意識は、
暮らしの細部に宿る

SOSŪ
select showroom

<https://sosu-ss-kanazawa.jp> | [@ sosu_ss_kanazawa](#)



C) 代表取締役社長 土田 和宏
D) JAXSON ジャクソンのバスタブ
A) ニッコー株式会社が展開する「BAINCOUTURE (バンクチュール)」
B) bath side Livingを提案したバスルーム

SOSŪ select showroom
石川県野々市市御経塚3丁目47番地 TEL.076-269-9988

その経験は、現在の「SOSŪ」にも
確かなつながっている。

— 満たされる空間へ —

ここで提案されているのは、単なる高級設備ではない。心地よい静けさや、美しい余白、触れた瞬間の感覚まで含めて、暮らしそのものの質を整えていく空間提案だ。

「価格ではなく、技術や提案力に価値を感じていただけるか。それがこれからの時代に必要な視点だと思っています」

住宅設備は、本来とても生活に近い存在だ。しかし近年、その役割は少しずつ変化している。単に便利であることだけではなく、その空間でどんな時間を過ごしたいか、どんな感情を得たいかまで求められるようになってきた。

機能を満たすだけの設備の提案だけではなく、空間の質感を整え、感覚を整え、暮らしそのものを美しく磨き上げ、満たされる空間づくりをサポートする存在でありたい。

三谷コンストラクションズが見つめているのは、空間の美しさだけではなく、そこで過ごす時間の質そのものである。

Concept | 私たちの考え方

「素数」は、1とその数自身でしか割ることができない特別な数。すべての自然数が素数の組み合わせで成り立つように、sosūが選定するアイテムもまた、空間を構成する“基礎的でありながら唯一無二”の存在です。

sosū select showroomでは、工業製品でありながら工芸品のような美しさを備えた水栓金具、洗面ボウル、バスアクセサリなどの選び抜かれた製品を実際に見て、触れていただけます。

設計初期のインスピレーションの創出から、具体的な製品選定、導入後の対応に至るまで、あらゆるプロセスで、理想の空間を実現するためにひたむきに向き合う皆様をサポートいたします。

Access | アクセス

SOSŪ select showroom (三谷産業コンストラクションズ株式会社)

921-8801 石川県野々市市御経塚3丁目47番地

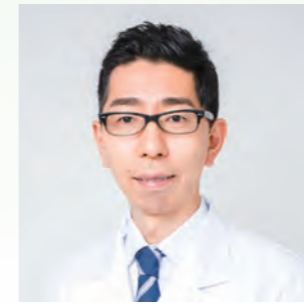
Tel/ 076(269)9988

Fax/ 076(269)4311



病院のイメージを一新、 ひかりプロジェクトの誕生へ

医療法人社団 紫蘭会 光ヶ丘病院



副院長
リハビリテーション科専門医

新藤 恵一郎



理事長補佐
リハビリテーション科専門医
一般社団法人ヒカリプロジェクト代表理事

新藤 悠子

紫蘭会グループは、高岡市郊外に位置する「光ヶ丘病院」と新高岡駅近くの「介護老人保健施設おぞら」の2箇所を拠点とし、地域一般病棟31床、回復期リハビリテーション病棟50床、医療療養病棟60床、特殊疾患病棟36床、介護医療院60床に加え、「デイケア光ヶ丘」「おぞら通所リハビリ」の2箇所の通所リハビリテーション、「訪問リハビリテーション光ヶ丘」、「サンシャインメドック」（健診・人間ドック）、「ケアハウスおぞら」、「有料老人ホームおぞら」などのサービスを有している。

光ヶ丘病院は、昭和56年に私（新藤悠子）の祖父が設立し、父がそれを手伝うということで関東から富山に5歳の時に転居してきた。それから小学生までの間は、病院の隣に家があったが、病院は暗いと感じ、小学校の同級生からは「老人病院」と言われ、ネガティブなイメージが強く、恥ずかしながらあまり近付かなかった記憶がある。

私が医学の道を志そうと思ったのは、やはり医者家系であった影響が大きいが、実は医学部に入ってもまだ医者として社会で働く像があまり描けていなかった。医学部4年の後、1年間いろんな世界を見てみたいと思い、医学部

4年の後1年間休学して、ニューヨークに行った。現地では語学学校やコミュニティカレッジに通いながら、ディサービスでボランティアをする機会に恵まれた。そこで初めて音楽療法やリハビリテーション医療の世界に触れ、医療に芸術を取り入れる活動をしていきたいと強く思うようになった。帰国後、リハビリテーション科の医師という職業があることを知り、その道を専門として目指すことを決意し、卒業、慶應大学医学部リハビリテーション医学教室に入局し、臨床・研究面でさまざまな経験をさせていただいた。「慢性期脳卒中片麻痺患者に対するBCS（経頭蓋直流電気刺激）とBCI（Brain Computer interface）の併用療法」で学位を取得。

2012-14年、現在当院の副院長である新藤恵一郎と一緒に、デンマーク・コペンハーゲンのMRI研究所に留学し、念願だった音楽と神経科学の研究「抽象的な音と形の統合のfMRI研究」などに関わった。帰国後も慶應義塾大学SFC（湘南藤沢キャンパス）の藤井進也先生と知り合い、音楽と神経科学に関する研究を現在も続けている。

私が、光ヶ丘病院に常勤で関わるようになったのは、ちょうどコロナが始

まった2020年4月。私は、主にデイケアや訪問リハビリの患者さんの診察やマネージメントに関わることになった。残念ながら病院の雰囲気やイメージはお世辞にも明るいとは言えず、革新をしていく必要があると強く感じた。ストイックにリハビリを頑張っていたデイケアの利用者さんは、「自分は麻痺があつて身体障害者であり社会の厄介者なんだ」とおっしゃった。色々な知識がある方だったので、そのような方もつと輝ける場所が必要だと感じた。

また、若年性認知症の患者さんの方が「ここ何年も外食なんて行ってないよ。奇声をあげて迷惑がかかるから」とおっしゃった。患者さんやご家族も安心して出かけられる場所がないなら作りたいと思うようになった。

まず、病院改革のコンセプトとして、病院は「病（やまい）の院」と書き、病気の人のだけの場所という暗いイメージがあるが、その枠を超えて、患者さんだけでなく、職員や地域の皆さんも子どもから高齢者まで障がいがあるなしに関わらず、皆さんが居心地よく過ごせてつながることができる場所になり、また地元高岡を元気にする地域貢献を行うていくような場所を目指そうということ、「ひかりプロジェクト」と名前をつけて、職員に提案した。患者さんには、その人らしく過ごせる場所、職員の皆様には、誇りを持って生き生きと働ける場所、地域住民の皆様には安心安全な場所となることが理想ではないかと。

まずは、病院内で「臨床美術」（アートセラピー）、「音楽療法」、「園芸療法」を取り入れた。そして、託児所を解放して地域の親子も参加できるアート・音楽クラスを定期的に開催したり、み

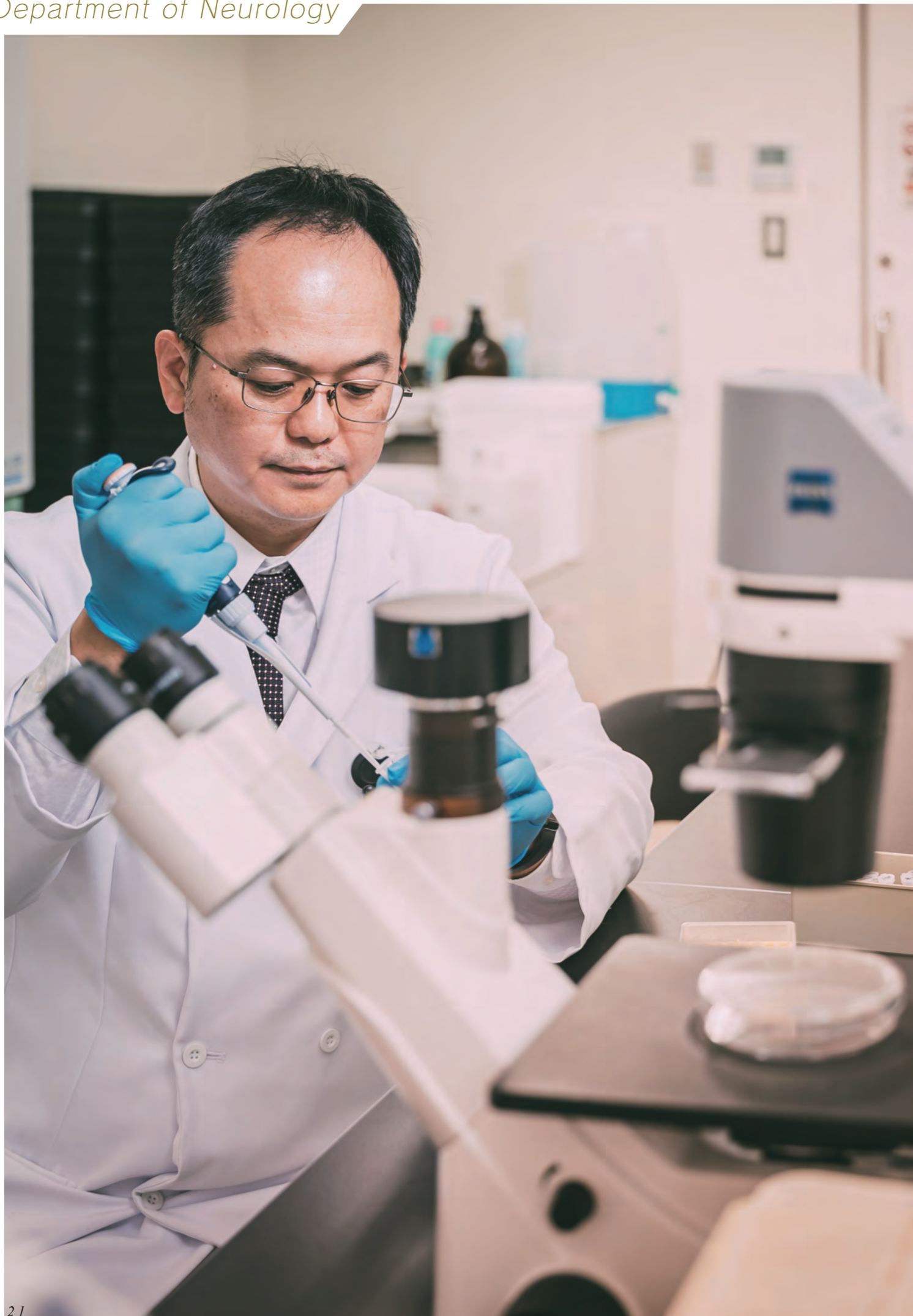


は、取り組みに対して共感して入職いただいていることが多く、今では、たくさんの方の協力者の皆さんと一緒に、進めることができていると感じており、本当に感謝している。



ひかりプロジェクト





UNIVERSITY OF HOSPITAL TOYAMA #山下 徹

ALSの治療をさらに前へ！ 若き研究心を刺激せよ

富山大学附属病院脳神経内科では今、研究マインドをもった人材の育成に情熱を注いでいる。

ALS(筋萎縮側索硬化症)の病態解明をはじめ認知症や脳卒中、てんかん、パーキンソン病などめざす研究分野は幅広い。

病気になった理由を考える

2025年8月に脳神経内科の新教授に就任し、最優先に取り組んできたのは「一にも二にも人材育成」と語る山下徹教授。理由を掘り下げていくと、若い人材に期待する思いの一端が浮かびあがってきた。

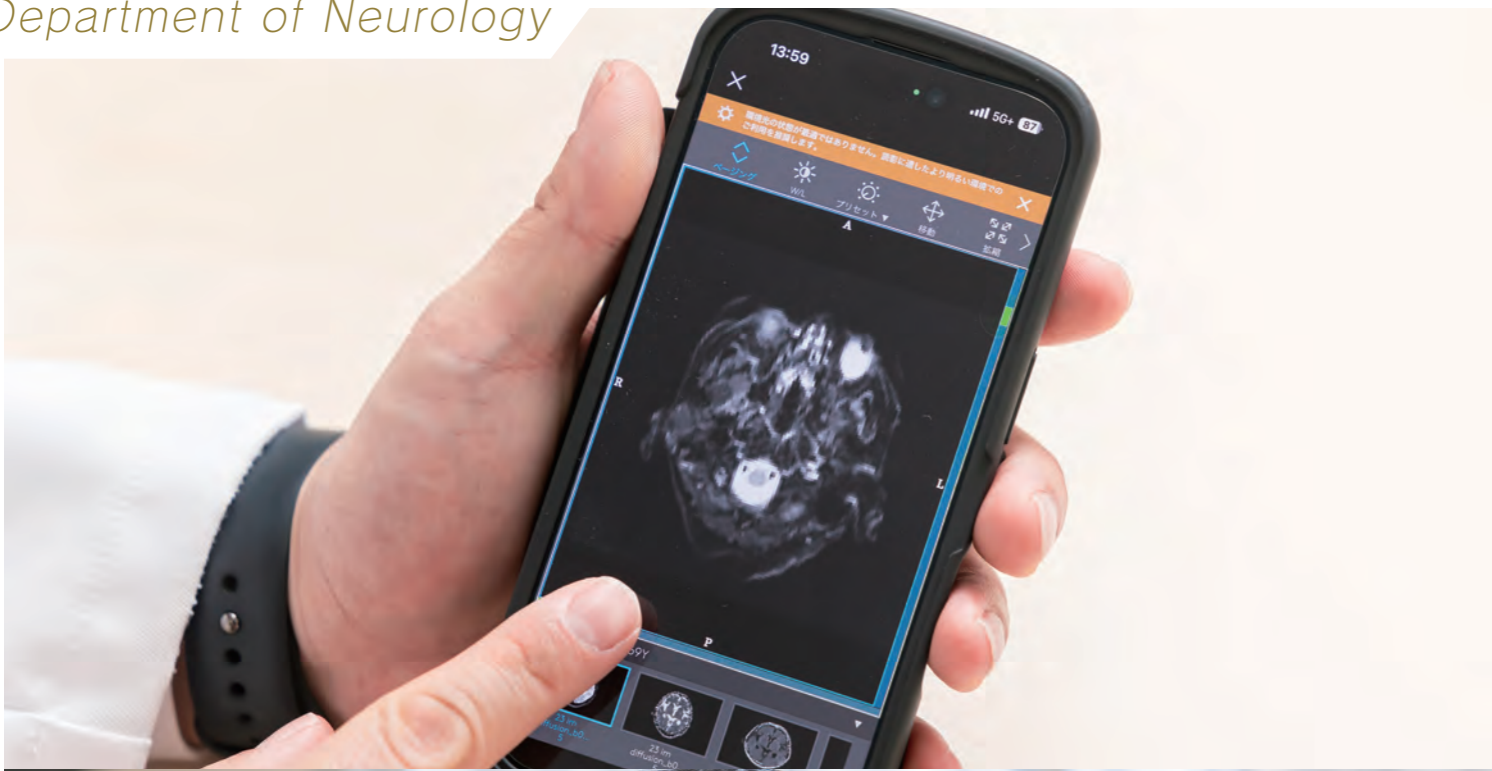
富山に着任する以前から、これからは人材育成がより重要になるので、医局員には臨床はもちろん、とくに研究に興味を持ってほしいと訴えてきました。私たちが医師になった頃と違って、今は研究マインドをもった医療人が少なくなってきました。専門医制度改革や働き方改革などの影響もあって、たとえば勤務時間外に研究室に長時間残って調べものをしたり、土日などに大学に出て研究したりするのが難しくなっています。それだけ大学院とか医師になりはじめの段階から、研究に接触することが少なくなっているのだと感じます。

最初の5年〜10年の間に研究に触れていないと、専門医になってからいざ

研究を始めようと思ってもなかなか難しいものです。若いうちからトレーニングを積み上げていた方が、研究マインドも育ちやすいし、成果や結果にもよりむずびつきやすいのです。

実際に、ある程度早い段階から研究をしてきた人と、そうではない人では、診療内容に違いがあるように思います。といってもそんな難しい話ではなく、私が医局員に言うのは「患者さんと向き合った時に、この人はなぜ病気になったのだろうと一回深く考えてみようよ」ということ。血圧一つとっても、たとえばこの患者さんは58歳とまだ若いのになぜ高血圧なのだろうと。思いを巡らせながら患者さんの話を傾けると「忙しくて、運動不足で、血圧高いから降圧剤をもらってのんでいたら薬が増えてしまった」というように、その人の生活や背景が浮かびあがってきます。

背景は、患者さん一人ひとり違います。同じ高血圧でも、運動不足だけではなく、塩分の摂り過ぎかもしれないし、もしかしたらご家族に血圧の高い人がいる遺伝性の要素があるかもしれないませ



ん。ちょっとしたことですが、患者さんの背景や生活習慣に耳を傾けると、薬だけで診察を終えるのではなく、後々の対応や結果が違ってきます。

研究マインドを持つことは、そうした何か病気や症状につながるような変化や発見を見逃さないことにも通じます。同様に、希少難病の家系を調べたり、網羅的に遺伝子を解析する中で、病態解明やもしかしら治療法につながる糸口がみつかるかもしれません。

若い人たちは、研究マインドをしっかりともって、基礎から臨床に橋渡しをするトランスレーショナルリサーチの役割を果たせるようになってほしい。それが教授としての私の最も重要なミッションの一つだと思っています。

ALSの原因遺伝子を発見

山下教授は、2025年7月、神経難病のひとつALS（筋萎縮性側索硬化症）を引き起こすメカニズムの一端を明らかにした。治療法開発への期待が高まっている。ALSは、脳脊髄にある運動神経細胞が減少し、運動麻痺

が進行する変性疾患だ。前任地（岡山大学准教授）で共同研究グループの一人として家族性ALSの日本人家系を解析し、家族性ALSを引き起こす原因遺伝子DNAJC7を突き止めた。

筋萎縮性側索硬化症（ALS）は進行性の運動ニューロン疾患で、TDP-43というタンパク質が細胞質に異常に蓄積することが多くの症例で確認されています。近年、TDP-43を含むタンパク質の品質を維持管理しているヒートショックプロテインとALSの関係が注目されてきていましたが、どれだけ関与するかなど詳細は明らかではありませんでした。

このような背景のもと、私が所属した共同研究グループでは、日本人の家族性ALS家系の解析を進めた結果、兄弟3人がALSを発症している家系において、ヒートショックプロテインに関連する遺伝子の一つであるDNAJC7に機能喪失変異が存在することを見出したのです。DNAJC7は、ヒートショックプロテイン群に属する分子シャペロン的一种で、細胞内にお

いてタンパク質の品質を維持・管理する重要な役割を担っています。これが機能喪失すると、異常タンパク質TDP-43の蓄積が促進され、結果として家族性ALSの発症につながる可能性があることが分かったのです。

DNAJC7と関連するヒートショックプロテイン群が関係していることが解明されたことで今後、ALSの新たな治療法の開発につながる可能性が高まっています。

細胞レベルでヒートショックプロテインを増やすと、ALSの原因タンパクといわれるTDP-43の凝集を抑える効果が見られるレベルまで研究は到達しています。しかし、治療法の開発までにはまだ超えないといけないハードルは多く、道のりは簡単ではありません。

ただ間違いなく言えるのは、家族性ALSの日本人家系の解析から、家族性ALSを引き起こす原因遺伝子特定できたことは、世界に誇れる成果だと思っています。現在、当教室では家族性ALSの治療法につながる共同研究を進めています。

す。それとともに、今後は地元富山県での希少難病が疑われる臨床検体や、患者さんのご家族の遺伝子を保管するDNAバンクといった環境整備などを進めながら、他の変性疾患についても病態解明や新たな治療法につながる研究に取り組んでいこうと考えています。

専門性を高め総合的に診る

脳神経内科の領域は幅広く、ALS以外にも対象となる疾患は数多い。それだけに、山下教授は、医局員には「ALSだけにこだわらず、なんらかの専門性を持って、これだけは人に負けないものを持つてほしい」と期待を込める。

私は、本学の脳神経内科の教授としては三代目で、これまで脳梗塞、認知症、ALSなどの難治性神経疾患を専門にしてきました。初代教授は脳卒中が専門で、二代教授は神経免疫でそれぞれ実績がある著名な先生です。これからの人々には、歴代教授が築き上げられた研究などストロングポイントを受け継ぎつつ、よりニーズの高いものにも



目を向けていってほしい。

脳神経内科は、先人のご尽力もあって入局者が増えて現在14人になっています。それもあって、ここ半年で一番大きく変わったのは、脳梗塞など急性期の診療にタッチするようになったことです。脳外科と脳神経内科など院内の連携体制がしっかりできていて、くも膜下など出血系は脳外科、脳神経内科は脳梗塞を診る分担になっています。

なかでも、携帯アプリを使って患者さんの診療情報をMRIやCT画像も含めて、脳外科の先生や医療関係者と共有できるようになったのは大きな変化です。高度なセキュリティで安心して病院内外での情報共有が可能なので、たとえば私や准教授が学会や出張などで遠隔地にいても、若手の先生が現場で不安にならずに診断や治療を決定できます。

診療については、都市部にある大病院であれば特定の疾患や治療法に専門特化した臨床、研究はあるかもしれませんが、富山大学のような地方大学では特定の疾患だけに偏らず、総合的に診ていく必要があると思っています。

その過程で、希望があれば国内留学や海外留学にも挑戦してほしいのです。

最近では、海外留学を希望する人も少なくなっていると思いますが、研究マイルドを高めていくには、普段と異なる環境に身を置いて自分を磨くことが重要です。若い人たちには、その喜びもぜひ体験してほしいと思っています。

研究に関しては、院内の共同研究を進めるのも一つだと思っています。富山大学は基礎の教室は脳や神経関係が多く、レベルも高いものがあります。脳神経分野に特化した部門との共同研究を通じて、富山発のオリジナルを発信していけたらと考えています。

挑戦心を持ってほしい

もう一つは、地域との連携です。富山に着任してから私は地元の基幹病院はじめ、県内の先生方と顔の見える関係をつくるようにしています。その中で1〜3カ月に1度、脳神経内科カンファレンスを開催し、地元の脳神経内科の先生方と症例などを持ち寄り、ディスカッションしています。

富山県はもともとそういう風土があった、出身大学が違っても脳神経内科を専門にする先生同士が一緒にあって、いろんな症例を県全体で検証し、解決策を見いだす歴史があります。それが患者さんの紹介、逆紹介の連携にもつながり、とても共感できる場所でもあります。

地域の先生方との話し合いで、とくに要望が多いのは県の東側は高齢化が進んでいるのと、脳神経内科医が少ないのでカバーしてほしいというニーズです。まずはそこをなんとかしたい。

地域で今求められるのは、脳卒中、認知症、てんかん、パーキンソン病などを、バランスよくきちんと診られる医師を輩出していくことです。それができたうえで、若い先生には挑戦する心とか、トランスレーショナルリサーチにチャレンジしてほしいと願っています。

私は、医師になった時、脳梗塞の患者さんに麻痺が残って、車椅子や松葉杖から抜け出せない生活を余儀なくされたことが悔しくて仕方ありませんでした。そのたびに、自分はなんのた

めに医師になったのだろう。気持ちと向き合う中で、病気を治すためにも研究したい。そう思ったのが研究のスタートです。

若い人たちもいろんな経験をする中で、臨床医としてきつと悔しい思いをすることがあると思います。そういう思いや体験を通して、研究心に灯がいたり、興味が膨らんでいくのを楽しみにしています。

Profile

山下 徹 (やましたとおる)

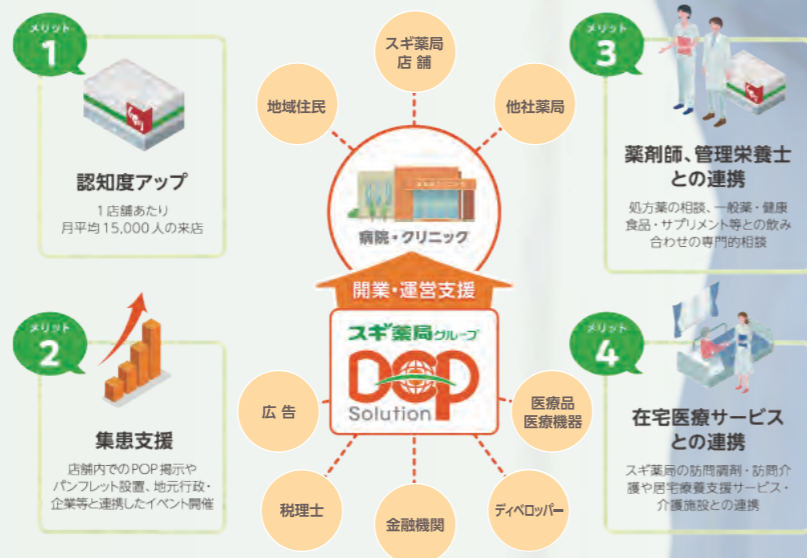
富山大学附属病院脳神経内科 教授

- 2001年 岡山大学医学部 卒業
- 2007年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程 卒業
- 2009年 米国コロンビア大学病理細胞生物学部門 博士研究員
- 2012年 岡山大学病院神経内科助教
- 2013年 岡山大学病院神経内科講師
- 2020年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 脳神経内科学 准教授
- 2025年 富山大学学術研究部医学系 脳神経内科 教授

ドラッグストア併設で 理想の開業を!

DCPソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成
 開業までのスケジュール作成
 開業地の選定、診療圏分析
 事業計画の策定
 融資の打診及び交渉
 設計、内装業者紹介及びアドバイス
 医療機器選定
 税理士、公認会計士の紹介
 広告相談
 従業員募集、採用、教育の補助
 開設手続き
 開業後の経営支援、拡大展開
 継承支援



DCPソリューションは
 豊富な経験とネットワークを持つ
 先生方のよきパートナーとして
 開業支援サービスを提供しています。

開業の事例や先生方の声をご覧ください



0120-911-545

平日(土曜・日曜・祝日を除く)の9時00分～18時00分

拠点

- 関東エリア(本社) ●東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号
ヒルトップ神田ビル
- 中部エリア ●愛知県大府市横根町新江62番地の1
- 関西エリア ●大阪府大阪市淀川区宮原一丁目2番4号
新大阪第5ドイビル13階
- 北陸・長野エリア ●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

<https://dcp-sol.com/article/docvoice/>



真のソリューションを実現する 価値あるサポート。

丸文通商は、医用機器と科学機器の供給を通じて、人々の健康維持と新しい産業の創造に貢献しています。取り扱いメーカーとの緊密な連携により最新の製品情報をスピーディに提供するとともに、自社のカスタマー・エンジニアによるメンテナンス体制を構築。真のソリューションを実現する価値あるサポートを展開しています。



技術・サービス部門

メンテナンスや修理などのアフターケアによって、ユーザーをサポートするとともに、オリジナル製品や各種システムの開発にも取り組んでいます。



科学機器・産業機器部門

絶えまなく技術革新を続ける科学機器の最新情報を幅広く収集しながら、ユーザーニーズに応じた、最適なマシン・システムをコーディネートしています。



医用機器部門

各種医用機器・システムの提供はもちろん、マーケティングに基づくアドバイスを行うなど、メディカルコンサルタントとして病院経営全般をサポートしています。

明日の健康と新産業創造のパートナー 丸文通商株式会社

<https://www.marubun-tsusyo.co.jp/>

金沢支店

〒920-0385 石川県金沢市松島一丁目40番地
TEL 076-269-1880 / FAX 076-269-2522

富山支店

〒939-8221 富山県富山市八日町247番地41
TEL 076-429-7190 / FAX 076-429-3277

福井支店

〒918-8236 福井県福井市和田中二丁目907番地
TEL 0776-23-8070 / FAX 0776-23-9500



医療はなぜ忙しくなり続けるのか

— 医師事務作業補助者が
現場で見てきたこと —

第1回では、医療従事者が無理なく働き続けるために何が重要なのかという問いを提示しました。今回は、その背景にある現場の実情について、医師事務作業補助者として見てきたことをもとに考えてみたいと思います。

医療の現場では、年々業務が増え続けています。診療そのものに加え、診療記録の入力や各種文書作成業務、カンファレンスや委員会活動、説明業務など、多くの仕事が発生的に発生しています。一つひとつは必要な業務ですが、それらが積み重なることで、現場の負担は確実に大きくなっています。

私が医師事務作業補助者になった当初から、医師の業務量の多さには驚かされました。診療が終わっても仕事は終わらず、むしろそこからまた別の本番が始まるように感じることも少なくありませんでした。そして現在、医師事務作業補助業務が浸透してからも、医療の質や安全性の確保、情報管理の

高度化など、求められる水準は年々高まっています。

こうした中で、「やりがいはあるが余裕がない」という声が現場から聞こえてくるのは、ある意味で自然なことかもしれません。

では、この状況の中で何が必要なのでしょう。それを知るために、現場で起きていることをもう少し丁寧に見てみる必要があります。

現場で強く感じているのは、本来取り組みべきことほど後回しになってしまっているという現実です。

例えば、人材の育成です。医療の質を維持し、持続可能な体制をつくるためには教育が欠かせません。しかし、日々の業務に追われる中で、十分な教育の時間を確保することは容易ではありません。

また、AIやICTの導入による医療DXも同様です。業務の効率化や負担軽減につながる可能性がある一方

で、導入や運用体制の整備には時間と労力が必要です。結果として、目の前の業務を優先せざるを得ず、取り組みが進まないという状況が生まれています。

本来は、医療従事者が無理・無駄なく力を発揮しながら働き続けるために必要な取り組みであるはずの教育やDXが、忙しさゆえに実現できない。この構造こそが、現場の大きな課題の一つであると感じています。

これまで医師の働き方改革では、多職種によるタスクシフトが進められてきました。看護師や薬剤師等の医療専門職、医師事務作業補助者などが役割を分担し、医師の負担を軽減していく取り組みは、一定の成果を上げてきたと感じています。

しかしその一方で、院内の人材だけで担える範囲には限界があることも、実感しています。業務を移した先の職種に負担が集中してしまい、「誰かの負担を別の誰かが引き受ける」という構図から抜け出せていない場面も少なくありません。

だからこそ今後は、「院内でどう分担するか」という視点に加えて、「院外の力をどう活用するか」という発想も必要になってくるのではないのでしょうか。

教育支援や業務整理、ICTの導入支援など、医療従事者でなくても担える領域については、外部の専門的な人材やサービスを活用することで、現場全体の負担を分散することが可能になります。

すべてを医療従事者だけで抱え続けるのではなく、役割を適切に切り分け、外にも開いていく。そのことが結果として、医療に関わるすべての人の負担を軽減し、無理なく働き続けられる環境につながっていくのではないかと感じています。

医療は、多くの人の支えによって成り立っています。その支え方を見直していくことが、これからの医療に求められているのではないのでしょうか。

(第3回につづく)



日本医師事務作業補助者協会

理事長 矢口 智子

福井県福井市上野本町

もりおか眼科

眼科



盛岡 正和 院長

【略歴】

- 2015年 福井大学医学部医学科 卒業
- 2017年 福井大学医学部附属病院 初期臨床研修 修了
福井大学医学部附属病院 眼科 医員
- 2023年 福井大学医学部附属病院 眼科 助教
- 2026年 もりおか眼科 開院

「目を拓く」をコンセプトに 地域に開かれた医療を実践



活気あふれる住宅街に 5月、クリニック開院

「もりおか眼科」は、交通アクセスのよさや暮らしやすさで人気を集める福井市北部の森田地区に5月8日、開院した。完成したばかりの眼科クリニックに一步入ると、そこは吹き抜けのゆとりある空間デザインの待合スペース。木目調でまとめた壁紙と大通りに面したガラス窓から注ぐ自然光が、やわらかく温かな雰囲気をつくり出している。

「小さなお子さんからお年寄りの方まで、あらゆる世代の方に気軽に足を運んでいただければと思います。そのため、少しでもリラックスしてもらえ、クリニックを目指しています。」

こう話し、優しい笑顔を浮かべる盛岡正和院長は、クリニックのコンセプトとして、「目を拓く」を掲げている。目はわずかにセンチほどの器官だが、人生の瞬間を映し出す、かけがえない存在だ。コンセプトには、暮らしに根づいたクリニックでの診療を通して、この小さくも大切な窓を守り、地域の人たちの人生の可能性や楽しさを広げていきたいとのメッセージが込められている。

予防・ケアから手術まで対応 大病院で磨いた技術を発揮

地域医療の最前線で一步を踏み出した盛岡院長は、福井大学医学部附属病院で、11年間にわたって腕を磨いてきた。経験を積み重ねる中で培った技術を、地域で暮らす人たちの診療に還元できるよう、クリニックには基幹病院と比較しても遜色ないほどの設備をそろえている。その一つが3D手術システムだ。専用メガネをかけ、大型モニターに映した高解像度の立体映像をもとに、白内障手術や網膜硝子体手術などで精密な手術を發揮している。

並行して、予防とケアにも重点を置く。医療事務4人、看護師4人のスタッフとともに、患者の目に関する不安や困りごとに真摯に耳を傾ける。「大病院にいたころから患者さんとコミュニケーションをとり、人間関係を築くことを心がけてきました。医療者として、一人ひとりと丁寧に向き合い続けていきたい」と盛岡院長。接遇やチームビルディングなどの研修・教育にも力を入れており、スタッフの成長を通してクリニックのアップデートにも心を砕く。



地域に向けては、積極的な検査や早期受診を呼びかける。「40歳以上になると、20人に1人が緑内障を発症するとされています。白内障が疑われる場合は、「まだ見えるから」と油断してはいけません。ぜひ検査や早期受診を心がけてください」。地域に開かれたクリニックを舞台に、盛岡院長は、前向きで積極的な取り組みを通して目の健康を守っていく思いを一層強くしている。

健やかな未来に、潤いを。

主なソリューション内容

- ・新規開業・開局支援
- ・医薬分業支援
- ・経営コンサルティング(事業承継、etc.)
- ・システム・医療機器コンサルティング
- ・各種研修会、医業経営情報配信サービス

総合窓口 本社 ソリューション部
TEL:076-239-0625
E-mail: solution@jp-finese.com



[本社/金沢支店] 〒920-0295 石川県金沢市大浦町ハ55番地 TEL 076(239)0032 FAX 076(239)0092
[支店] 小松支店・七尾支店・富山支店・高岡支店・黒部支店・福井支店・敦賀支店・名古屋支店
[営業所] 高山営業所・三重営業所・豊橋営業所

ファイネス ALL in for メディカルフェアが開催

2026年3月8日、株式会社ファイネス本社にて、「ファイネス ALL in for メディカルフェア」が開催されました。

今回のフェア開催の背景には、2026年度診療報酬改定において、物価高騰や賃金上昇への対応が重点課題となったことがあります。一方で、現役世代の保険料負担を抑制するため、限られた財源の中で医療費全体の適正化を図る必要性も示されています。

医療DXやICT連携等による効率化、外来医療の機能分化・連携の推進など、医療提供体制の維持と地域医療の継続に向けた取り組みが進む中、医療機関・薬局には、業務の見直しや経営改善への対応が引き続き求められています。



ファイネスでは、地域医療を支える医薬品卸売企業として、お取引先である医療機関・薬局の皆様の課題解決を支援するため、「地域医療機関の未来」をテーマに、診療報酬改定セミナーと医療DX・ソリューション展示会等を組み合わせた企画を実施しました。



当日会場には、病院・医院の先生方をはじめ、薬局関係者、メーカー関係者など、多くの医療関係者が来場しました。会場では、外部講師を招いた診療報酬改定に関するセミナーのほか、最新の医療機器や医療DXソリューションの展示が行われました。来場者は、今後の経営方針を考えるうえで参考となる情報や、経営をサポートする各種機器・サービスに高い関心を寄せていました。



さらに、石川県薬剤師会の協力によるモバイルファーマシーの車両展示や、2024年に稼働したファイネス金沢物流センターの見学など、災害対策や物流面について理解を深める企画も設けられました。

当日は150名を超える参加者が訪れ、盛況のうちに終了しました。



「財務対策力」で差をつける

財務支援

医療法人・クリニック専門の法人コンシェルジュデスク

医療法人・クリニック向けサービスメニュー

財務・リスク対策支援

- ✓ 損金×事業補償対策支援 (税対策+α)
- ✓ 社保削減×退職金運用支援 (DC・保険)
- ✓ 内部留保資産運用支援 (余剰資金活用)
- ✓ 相続・事業承継支援 (相続税対策・争続対策)
- ✓ 事業継続計画策定 (BCP策定・認定支援)

職員エンゲージメント

- ✓ 職員研修 (リスクマネジメント・資産運用等)
- ✓ ライフプラン作成 (保障診断・資産運用)
- ✓ 退職金制度 (企業型DC導入&活用・運用支援)
- ✓ 老後資金相談 (年金対策・老後資産形成)
- ✓ 終活相談 (生前整理・遺言・遺品整理)

ご利用いただく3つのメリット

資産運用の
定期最適化で
財務体力UP!!

定期的リスク診断
事業補償対策で
事業継続力UP!!

職員様の資産運用
金融教育で
職員満足度UP!!

医療法人・クリニック専門の法人コンシェルジュデスク

KOZAKA

私たちは「保険を売る代理店」ではなく、企業を守るリスク管理の専門家として機能します。医療法人・クリニックに潜在する重大リスクを事前に可視化・対策し、先生方・職員様・患者様の「安心」「安全」をさらに強固にすることを目指します。

担当コンシェルジュ
浅野 広太

KOZAKAが医療機関から選ばれる理由

- ✓ 石川県地域密着できめ細やかな現場支援・継続支援
- ✓ 法人に特化したリスク管理・財務支援専門家が担当
- ✓ 石川県内の大手病院・医療機関のクライアント様多数

小酒保険

株式会社小酒保険

〒923-0032
石川県小松市荒屋町3-1
<https://kozaka.com/>

まずはお気軽にご相談ください

0761-22-6728

受付時間：平日9時から17時まで（土日祝休み）

お問い合わせ
フォームはこちら
スマホで簡単連絡!



変わりゆく医療を

あなたとともに。

取材にご協力いただきました医療者の方々、ご協賛していただきました企業様に心より感謝申し上げます。
また、医療情報誌「ISHIN」では私たちの活動にご賛同いただけるスポンサーを募っています。

Special Thanks

【広告掲載企業】

株式会社 スギ薬局
スギメディカル株式会社
株式会社 DCP ソリューション
株式会社 石川コンピュータ・センター
みづほ工業株式会社
株式会社 ファイネス
株式会社 アメニティ
丸文通商株式会社
三谷産業コンストラクションズ株式会社
株式会社浦建築研究所
株式会社 福光屋
増江会計
株式会社小酒保険
株式会社 家元

【協賛企業】

料亭 つば甚
株式会社 富士タクシー

株式会社 キョー・エイ、株式会社 兼六、加賀種食品工業株式会社、室野硝子株式会社、株式会社 みづほ室内工業、株式会社 山崎、

有限会社 ソフト AZ、司法書士松永美里事務所、株式会社 岸グリーンサービス

ISHIN

石川県

- 金沢大学附属病院
- 金沢医科大学病院
- 石川県立中央病院
- 金沢市立病院
- 石川県立こころの病院
- 加賀市医療センター
- 公立河北中央病院
- 公立穴水総合病院
- 公立宇出津総合病院
- 公立つるぎ病院
- 公立能登総合病院
- 公立羽咋病院
- 公立松任石川中央病院
- 国民健康保険 小松市民病院
- 市立輪島病院
- 珠洲市総合病院
- 町立富来病院
- 能美市立病院

- 石川県済生会金沢病院
- 独立行政法人地域医療機能推進機構 金沢病院
- 金沢聖霊総合病院
- 金沢赤十字病院
- 独立行政法人国立病院機構 医王病院
- 独立行政法人国立病院機構 石川病院
- 独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター
- 独立行政法人国立病院機構 七尾病院
- 社会福祉法人松原愛育会 石川療育センター
- 医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院
- 医療法人社団浅ノ川 金沢脳神経外科病院
- 医療法人社団浅ノ川
- 心臓血管センター金沢循環器病院
- 医療法人社団浅ノ川 千木病院
- 医療法人社団光仁会 木島病院
- 医療法人社団慈恵会 久藤総合病院
- 医療法人社団 下崎整形外科医院
- 医療法人社団橋会 整形外科米澤病院

- 医療法人社団田谷会 田谷泌尿器科医院
- 医療法人社団博友会 金沢西病院
- 医療法人社団藤聖会
- 金沢メディカルステーション ヴィーク
- 国家公務員共済組合連合会 北陸病院
- 小松ソフィア病院
- 社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院
- 社会医療法人財団董仙会 恵寿金沢病院
- 医療法人社団竜山会 金沢古府記念病院
- 医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院
- 特定医療法人扇翔会 南ヶ丘病院
- 特定医療法人社団勝木会
- やわたメディカルセンター
- 公益社団法人 石川勤労者医療協会 城北病院
- 医療法人社団博仁会 小池病院

DLT 木造仮設住宅（珠洲） 設計：坂茂建築設計 施工：株式会社 家元

北陸の暮らしに寄り添う家づくり 地域と共に歩む住宅会社です。

私たち株式会社家元は北陸を中心に、
地域の風土と家族の暮らしに根ざした住宅をつくり続けてきました。
令和6年能登半島地震では、被災された方々への仮設住宅提供、応急復旧支援、
物資の集積及び現地支援など多角的な復興活動を展開。
これからの暮らしを、地域の皆さまと共に築いてまいります。



GOOD DESIGN
AWARD 2025

グッドデザイン賞 2025 「大賞」
内閣総理大臣賞受賞



IEMOTO

美しい人になる
家元の家。

富山県

- 富山大学附属病院
- 富山県立中央病院
- 富山市立富山市民病院
- あさひ総合病院
- 射水市民病院
- かみいち総合病院
- 黒部市民病院
- 公立南砺中央病院
- 富山県リハビリテーション病院・
こども支援センター
- 高岡市民病院
- 市立砺波総合病院
- 南砺市民病院
- 公立学校共済組合 北陸中央病院
- 独立行政法人国立病院機構 富山病院
- 独立行政法人地域医療機能推進機構
高岡ふしき病院
- 独立行政法人労働者健康安全機構
富山ろうさい病院
- 富山県済生会高岡病院
- 富山県済生会富山病院
- 富山赤十字病院
- 医療法人財団恵仁会 藤木病院
- 医療法人社団秋桜 丸川病院
- 医療法人社団尽誠会 野村病院
- 医療法人社団藤聖会 富山西総合病院
- 医療法人財団五省会 西能病院
- 富山県厚生農業協同組合連合会 高岡病院
- 富山県厚生農業協同組合連合会 滑川病院

福井県

- 福井大学医学部附属病院
- 福井県立病院
- 市立敦賀病院
- 独立行政法人国立病院機構 あわら病院
- 独立行政法人国立病院機構 敦賀医療センター
- 福井県済生会病院
- 独立行政法人地域医療機能推進機構
福井勝山総合病院
- 福井赤十字病院
- 医療法人福井心臓血管センター
福井循環器病院
- 医療法人厚生会 福井厚生病院



私たちは地域の皆様に 寄り添い、頼られる 薬剤師になります。



超高齢社会の中で、ドラッグストアに求められる機能、地域社会において果たすべき役割が拡大しています。その中で当社は、地域の皆様の『健康の維持・予防・未病』から『治療・看護・介護・終末期』まで、生涯に渡ってトータルなヘルスケアサポートを行います。



血管年齢、筋肉量・脂肪量等がいつでも無料で測定可能。管理栄養士がカウンセリングします



初めての介護の相談や介護用品の販売・レンタルまで福祉用具専門相談員が親切に対応します

中部・関西・関東・北陸・信州・
北海道・東北に出店エリア拡大中!

グループ合計
1,760店舗
(2024年6月末現在)

関西 581店

北陸・信州 84店

北海道・東北 3店

関東 502店

中部 590店

■ 全社売上高 **7,444.8** 億円 +11.5%
(年間計) 前期比

■ 調剤売上高 **1,587.8** 億円 +11.5%
(年間計) 前期比

■ 処方箋枚数 **1,475.9** 万枚 +14.3%
(年間計) 前期比

■ 訪問調剤対応店舗数 **601** 店舗 +6.4%
(年間計) 前期比

■ 訪問調剤患者数 **189,109** 名 +7.4%
(年間計) 前期比

2023年度実績

詳しくはHPをご覧ください。 <https://www.drug-sugi.co.jp/>

スギ薬局

検索